

神様二題

福田浩尚

ずいぶん昔のこと、おそらく何万年も前のこと、神様が動物たちを呼んできめたことがある。勿論、動物の中には人間も含まれている。

(1)

神様が動物に対して決めなければならぬことに発情期の問題があった。いうまでも無いことだが、動物にとって命を子孫に伝え種を存続していくためには、雄、雌が発情し交尾を行うことが大変重要なことである。神様は動物を一匹つつ前に呼んではい、ねずみよ、おまえは年になんかい、虎よ、何回と申し渡し決めていつて、馬の番になった。神様は、馬よ、お前は年に一回とする、馬はこれがおおいに不満であった。神様、そんな殺生な、せめて二回くらいにさせて下さいよ。神様は、あくまでも強硬で駄目だと言い張った。とうとう馬は怒り出して、後ろ足で神様を蹴っ飛ばしてしまった。馬も神様も実に不愉快であった。

その後と呼ばれたのが人間であった。神様は、馬に蹴っ飛ばされたおでこが痛み出し、もうどうでもいいやけっぱちな気分になっていた。人間がおそるおそる、何回にしましよかかと問うと、神様はもう、勝手にしろ、お前の好きなだけすればいいじゃないかと投げやりに答えた。

その結果どうなったか、人間以外の動物は、ちゃんと神様が決めた回数だけ発情期があり、性交（交尾）を行

っているのに対して、自由にしろと言われた人間だけは、決められた回数もなく、のべつまくなしにやりまくっていいことになったと言う。

(このエピソードは、前にも他のエッセイで書いたことがある。誰が考えたのか知らないが笑い話としてよくできていると思う。)

(2)

次のはなしは、寿命の問題である。これは、テレビを見ていたら森繁さんが語っていた話で印象に残っている。そこでここに紹介する。森繁さんは当時、もう九十歳を越していたと思う。少し記憶があいまいなので、寿命年数とか、動物が実際森繁さんが話したものと違っているかもしれない。

ある日、神様がやはり動物たちを呼んでそれぞれの寿命を決めることになった。最初に呼ばれたのがロバであった。ロバよ、お前の寿命は三十年としよう。すると、ロバは言った。いやあ、神様、三十年は長すぎます。あくせく生きてなんになりましょう。十年で十分です。その次に呼ばれたのがネコであった。ネコよ、お前には二十年の命をあげることによしよう。いやあ、神様、私は十年で結構です。こうして、ロバやネコが断るので神様もほとほと困ってしまった。そのあとの順番が人間であった。人間よ、お前は三十年の寿命としよう。神様はまた、長いと言って断られるかと気にしながら、おずおずと言った。ところが、あにはからんや、人間はこういった。神様、三十年では短すぎ過ぎます。もう少し長くしていただけないでしょうか。神様は、少し頭が混乱してしまった。あるものは、短くしてくれというし、あるものは、

長くしてくれと言う。神様はちよつと頭を休め、しばらくしていいことを思いついた。そうか、それではこうしよう。ロバは十年で良いと言っている。それに、ネコも十年でいいそうだ。だから、お前ら人間にはロバの分とネコの分をやることにしよう。ロバは二十年、ネコは十年、あわせて三十年をまわしてやるから、もともとの年を加えて、合計六十年でどうだ。人間のほうも、少し不満な様子だったが、ロバやネコから寿命を分けてもらったのだから文句も言えずこれを不承不承のむことにした。こうして、人間の寿命が決まった。

その結果、人間は産まれて三十年間は、本来の人間の寿命だから、楽しく充実した人生が送れる。青春時代は夢もあり愉快的な時期でもある。それが過ぎての二十年間はロバからもらった期間の人生である。だからロバのように苦労して働く苦しい人生となる。会社生活でも上から無理を言われこき使われる。家へ帰れば女房がガミガミ怒る。まるで、飼い主からムチでひっぱたかれるロバの境遇である。それでも耐え忍んで家族のためにと歯を食いしばって生きていかなければならない人生である。そして最後の十年は猫から分けてもらった期間である。うとうととひなたぼっこで猫のように眠ってばかり過ごすして最後の時を迎える。

と、まあ、こんな具合である。

(3)

しかし、神様のほうとすればこれで満足したであろうか。と、ここからは、私の創作である。しばらくして、神様も頭を冷やして静かになって考えてみた。どうも、性交の回数にしても、寿命の年数にしる人間にうまくし

てやられたのではないか。このままでは、他の動物に対して不公平にならないか。そう考えると今まで帳面を引っ張り出して動物の寿命表を調べてみた。すると、人間より長いものにカメがいた。しかし、カメはなにかにつけてのろまな動物だから、長生きしても害はない。仕方がないだろう。人間にはそうはいかない。そこで、神様は密かにこう決めた。よし、人間には、他の動物に無いものを与えよう。神様は早速、人間をそばに呼びよせて言った。お前にいいものを与えよう。それは、「欲」というものだ。この「欲」というものがなければ、人生は面白くない。これがあればこそ、性も生も楽しく享受できるのでよともっともらしく言った。

しかし、これは実は神様の人間に対する周到な仕返しだったのである。

人間はこれ以降、「欲」というものを背負って生きていかなければならない存在になった。発情期がない（年から年中発情してるから）人間の男は女を始終求めて炎熱の恋の地獄を味わわなければならない。更に、寿命をいつまでも長くもたせようとする生命欲を持った人間は、いつか死んで行かなければならないという運命を知って、死に対する恐怖の苦しみをいつも味わって生きていかなければならない。これは、人間以外の他の動物にはないことである。他の動物は、決められた回数だけ交尾をし、命が尽きるときを知れば従容として死を受け止め、いさぎよく生をまっとうする。あわれな人間よ。

終わり 2010年月4月